

縮図

徳田秋声



縮図



徳田秋声

ほるぷ出版

市古貞次・小田切進・編 日本の文学 71

縮 図

著 者 徳田秋声

責任編集 市古貞次（古典編）

小田切進（近代編）

発行日 昭和五十九年八月一日 初版第一刷発行

発行所 株式会社 ほるぷ出版

代表 中森蒔人

東京都新宿区新宿二―十九―十三

電話（〇三）三五四―七〇三二（代）

総発売元 株式会社 ほるぷ

東京都新宿区新宿二―十九―十三

電話（〇三）三五六―六二二一（代）

製 作 東京連合印刷株式会社

印刷 図書印刷株式会社

目次

縮図

日蔭に居りて

山荘

時の流れ

素描

郷愁

裏木戸

跋

追記

注

「小説の名人」、秋声と『縮図』

挿絵八葉

1

3

37

88

137

228

312

391

398

401

412

徳田一穂

徳田一穂

保昌正夫

内田 巖

縮

図

ひかげ
日蔭に居りて

一

晩飯時間の銀座の資生堂^{しせいどう}は、いつに変わらず上も下も一杯であった。

銀子と均平とは、暫く^{しばら}二階の片隅の長椅子^{ツファア}で席の空^あくのを待った後、やがてずっと奥の方の右側の窓際のところへ座席を取ることが出来、銀子の好みで此の食堂での少し上等の方の定食を注文^{ちゅうもん}した。均平が大衆的な浅草^{あさくさ}あたりの食堂へ入ることを覚えたのは、銀子と附合^{つきあ}いたての、もう大分古いことであったが、それ以前にも彼がぐれ出した時分の、舞踏仲間につれられて、下町の盛り場に

ある横丁のおでん屋やとんかつ屋、小料理屋へ入って、夜更まで飲み食いをした時代もあり、映画の帰りに銀子に誘われて入口に見本の出ているような食堂へ入るのを、そう不愉快にも感じなくなっていた。反って大衆の匂いをかぐことに興味をすら覚えるのであった。それは一つは養家へ対する反感から来ているのもあり、自身の生活の破綻を諦め忘れようとする意気地なさの意地とでも言うべきものであった。

しかし今は長いあいだ恵まれなかった銀子の生活にも少しは余裕が出来、いくらか吻とするような日々を送ることが出来るので、いつとはなし均平を誘うて映画館の帰りに、いくらかの贅沢が許されるようになり、喰いしん坊の彼の時々^{ふけ}の食慾を充たすことくらいは出来るのであった。勿論食通という程料理の趣味に耽るような柄でもなかったが、均平自身は経済的にも成るべく合理的な選択はする方であった。戦争も足かけ五年つゞき物資も無くなっているの

には違いないが、生活の何の部面でも公定価格にまで総ての粗悪な品物が吊りあげられ、商品に信用のおけない時代であり、景気のいゝに委せて、無責任をする店も少くないように思われたが、一方購買力の旺盛なことは疑う余地もなかった。

パンやスープが運ばれたところで、今まで煙草をふかしながら、外ばかり見ていた均平は、吸差を灰皿の縁におき、バタを取り分けた。五月の末だったが、その日はひどく冷氣で、空気がじとじととしており、鼻や気管の悪い彼はいつもの癖でつい嚏をしたり、ナプキンの紙で水漬をふいたりしながら、パンを捲っていた。

「ひょっとすると今年は凶作でなければいゝがね。」

素朴で単純な性格を、今以て失わない銀子は、取越苦勞などしたことは、曾てないように見えた。幼少の時分から、相当生活に虐げられて来た不幸な女性

の一人でありながら、何うかするとお天氣が遽にわるくなり気分がひどく陰しくなることはあつても、陰氣になったり鬱ぎ込んだりするようなことは、絶対になかった。苦勞性の均平は、どんな気分のかさ／＼する時でも、そこに明るい氣持の持方を発見するのであった。彼女にも暗い部面が全然ないとは言えなかったが、過去を後悔したり現在を嘆いたりはしなかった。毎日の新聞は能く読むが、均平が事件の成行を案じ、一応現実を否定しないではいられないのに反し、動もすると統制で蒙りがちな商売の遣りにくさを、こぼすようなこともなかった。

「幕末には二年も続いてひどい飢饉があつたんだぜ。六月に裕を著るといふ冷氣でね。」

返辭のしようもないので、銀子は黙ってパンを食べていた。

次の皿の来る間、窓の下を眺めていた均平は、ふと三台の人力車が、一台の

自動車と並んで、今人足ひとあしの目間めまぐら苦しい銀座の大通りを突切つっきろうとして、しばし此の通りの出端でばなに立往生しているのが目についた。そしてそれが行きすぎる間もなく、又他の一台が威勢よくやって来て、大通りを突切って行った。

二

勿論車もちろんは二台や三台に止とどまらなかつた。レストウランの食事時間と同じに、ちょうど五時が商売の許された時間なので、六時に近い今が恰あたかも潮時でもあるらしく、ちょっと間をおいては三台五台と駆出かけだして来る車は、看々みるみる何十台とも知れぬ数に上り、動やもすると先が問つかえるほど後から押寄せて来るのであった。それは殊に今日初めて見る風景でもなかったが、食事前後にわたって可なり長い時間のことなので、ナイフを使いながら窓から見下みおろしている均平の目に、時節柄異様の感じを与えたのも無理はなかった。

ここは恐らく明治時代における文明開化の発祥地で、又その中心地帯であつたらしく、均平の少年期には、既に道路に煉瓦舗装が出来ており、馬車がレールの上を走っていた。殆ど総ての新聞社はこの界限に陣取って自由民権の論陣を張り、洋品店洋服屋洋食屋洋菓子屋というようなものも此処が先驅であつたらしく、この食堂も化粧品が本業で、わずかに店の余地で縞の綿服に襷がけのボイが曹達水の給仕をしており、手狭な風月の二階では、同じ打份の男給仕が、フランス風の料理を食いに来る会社員達にサービスしていた。尾張町の角に、ライオンと云うカフェが出来、七人組の美人を給仕女に傭つて、慶応ボイの金持の子息や華族の若様などを相手にしていたのもそう遠いことではなかつた。その頃になると、電車も敷けて各区からの距離も短縮され、草蓬々たる丸の内の原っぱが、立ろに煉瓦造りのビル街と変り、日露戦争後の急速な資本主義の発展と共に、欧風文明も漸くこの都会の面貌を一新しようとしていた。

銀座には旨い珈琲や菓子を食べさす家が出来、勧工場の階上に尖端的なキャヴァレイが出現したりした。やがてデパートメントストアが各区域の商店街を寂れさせ、享楽機関が次第に膨脹するこの大都会の大衆を吸引することになるであらう。

この裏通りに巢喰っている花柳界も、時に時代の波を被って、或る時は彼等の洗鍊された風俗や日本髪が、世界戦以後のモダニズムの横溢につれて圧倒的に流行しはじめた洋装やパーマネントに押されて、昼間の銀座では、時代錯誤の可笑しさ身すばらしさをさえ感じさせたこともあったが、明治時代の政權と金權とに、楽々と育まれて来たさすが時代の寵児であつただけに、その存在は根強いものであり、或る時は富士や桜や歌舞伎などと共に日本の矜りとして、異国人にまで讃美されたほどのので、今日本趣味の勃興の蔭、時局的な統制の下に、軍需景氣の煽りを受けつゝ、上層階級の宴席に持囃され、たとい一時的

にもあれ、曾ての勢いを盛返して来たのも、この国情と社会組織と何か抜き差しならぬ因縁関係があるからだとも思えるのであった。

「今夜はとんぼあたりで、大宴会があるらしいね。」

均平は珈琲を掻きまわしながら私語いた。

生来ぶっ切ら棒の銀子は、別に返辞もしなかったが、彼女は彼女でそんな事よりも、もっと細かいところへ目を注いでいて、車のなかに反りかえっている女達の服装について、その地や色彩や柄のことばかり気にしていた。それというのも彼女も亦場末とはいいながら、一かどの芸者の抱え主として、自身はお化粧嫌いの、身装などに一向頓著しないながらに、抱えの御座敷著には、相当金をかける方だからであった。それも安くて割のいゝものを捜すとか、古いものを押くり返し染め返したり、仕立直したり、手数をかけるだけの細かい頭腦を働かすことはしないで、総て大雑把にてきぱき捌いて行く方で、大抵は呉服

屋まかせであったが、商売人の服装には注意を怠らなかつた。

「この花柳界は出先が遠くて、地理的に不利益だね。」

均平は^{つぶや}呟きながら、いつか^{たそがれ}黄昏の色の迫って来る街をぼんやり見ていた。

三

均平は、こんな知名の華やかな食堂へなぞ入る^{たび}度に、今ではちょっと照れ気味であった。今から十年余も前の四十前後には、一時ぐれていた時代もあって、ネオンの光を求めて、其頃^{そのころ}全盛を極めていたカフェへ入り浸ったこともあり、本来そう好きでもない酒を^{あお}呷って、連中と一緒に京浜国道をドライブして^{ほんもく}本牧あたりまで踊りに行ったこともあったが、その頃には船会社で資産を作った養家^{もち}から貰った株券なども多少残っていて、可なり派手に札びらを切ることも出来たのだが、今は^{すつかり}悉皆境遇がかわっていた。今から回想してみると其頃の世界

はまるで夢のようであった。これという生産力もなく、自暴気味でぐれ出したのが段々嵩じて、本来の自己を見失ってしまい、一度軌道をはずれると、抑制機も利かなくなつて、夢中で遊びに耽つていたので、酒の醒めぎなどには、何か冷たいものがひやりと背筋を走り、昔の同窓の噂などを耳にすると、体が疼くような感じで飲んだり遊んだりすることが眞実は別に面白い訳ではなかった。殊に雨のふる夜更などに養家において来た二人の子供のことを憶い出すと、荊で鞭打たるゝように心が痛み、氣弱くも枕に涙することも屢々であった。しかし殆ど酷薄ともいえる養家の仕打に対する激情が彼の温和な性質を、そこへ駆り立てた。

今は既にその悪夢からもさめていたが、醒めた頃には金も余すところ幾許もなかった。それでも氣紛れな株さえやらなかったら、新婚当時養家で建てゝくれた邸宅まで人手に渡るようなことにもならなかったかも知れなかった。

その頃には世の中もかわっていた。放漫な財政の破綻もあって、財界に恐慌が襲い来り、時の政治家によって財政緊縮が叫ばれ、国防費がひどく切り詰められた。均平も学校を卒業すると直ぐ、地方庁に官職をもったこともあるので、政治には人並みに興味があり、議会や言論界の動静に、それとなく注意を払ったものだったが、彼自身の生活がそれ処ではなかった。それに官界への振出しに、地方庁で政党色の濃厚な上官と、選挙取締りのことなどで衝突して、即日辞表を叩きつけてからは、官吏がふつふつ厭になり、一時新聞の政治部に入っ
て見たこともあったが、それも客気の多い彼には、人事の交渉が煩わしく、直
きに罷めてしまい、先輩の勧めと幹旋で、三村の妹の婿が取締をしている紙の
会社へ勤めた。そこがしっくり筈になっているとも思えないのであったが、田舎に
残っている老母が、どこでも尻のおちつかない、物に飽き易い彼の性質を苦に
して漢学者の父の詩文のお弟子であった其の先輩に頼んで、それとなし彼を戒